

# 英語の分詞構文と接続詞に関する一考察

佐々木 一 隆

## 1. はじめに

英語の分詞構文には、(1) のように接続詞を伴って、主節との意味関係を明示する場合がある。

(1) *Since leaving school, I have never met George again.* (Close 1975: 92)

この文は「退学以来、私はジョージに一度も会っていません」という意味で、分詞構文である *leaving school* の前に接続詞 *Since* が添えられて、主節に対して「時」を表す意味関係を明示している。Close (1975) によれば、この場合の接続詞 *Since* は「時」を表す解釈ならば可能であるが、「理由」を表す解釈の場合は許されないという。

(1) と同様の意味関係は、(2) のような接続詞を伴わない通常に分詞構文や、(3) のような従属節を用いて表すこともできるが、これらの場合は「時」の解釈だけでなく、少なくとも「理由」の解釈も存在する。

(2) *Leaving school, I have never met George again.*

(3) *Since I left school, I have never met George again.*

本稿の目的は、(1) のような英語の分詞構文と接続詞の共起可能性について、対応する従属節や接続詞を伴わない通常に分詞構文と比較しつつ、その統語的・意味的特質を分析することにある。

## 2. 接続詞付き分詞構文と主節の意味関係

接続詞を伴う分詞構文が主節に対してもつ可能な意味関係は、「時」「同時性」「条件」「譲歩・対比」「様態」などである。以下の (4)–(16) において、a は当該の接続詞付き分詞構文を、b は対応する従属節をそれぞれ含む例文である。<sup>1</sup>

## A. 「時」を表す場合

- (4) a. *When writing a business letter, begin 'Dear Sir'.* (Close 1975: 92)  
 b. *When you are writing a business letter, begin 'Dear Sir'.*
- (5) a. *After reading the story, I did a crossword puzzle.* (Close 1975: 92)<sup>2</sup>  
 b. *After I read the story, I did a crossword puzzle.*
- (6) a. *Before going to the dentist, I have a cup of coffee.* (Close 1975: 92)  
 b. *Before I go to the dentist, I have a cup of coffee.*
- (7) a. *Since leaving school, I have never met George again.* (Close 1975: 92)  
 b. *Since I left school, I have never met George again.*
- (8) a. *Once deprived of oxygen, the brain dies.* (江川 1991: 352)  
 b. *Once it is deprived of oxygen, the brain dies.*

## B. 「同時性」を表す場合

- (9) a. *While waiting at the dentist's, I read a whole short story.* (Close 1975: 92)  
 b. *While I was waiting at the dentist's, I read a whole short story.*

## C. 「条件」を表す場合

- (10) a.  $\left\{ \begin{array}{l} \textit{If} \\ \textit{Unless} \end{array} \right\}$  *arriving by coach, please let the secretary know.* (Close 1975: 93)
- b.  $\left\{ \begin{array}{l} \textit{If} \\ \textit{Unless} \end{array} \right\}$  *you are arriving by coach, please let the secretary know.*

## D. 「譲歩・対比」を表す場合

- (11) a.  $\left\{ \begin{array}{l} \textit{Though} \\ \textit{While} \end{array} \right\}$  *impressing the examiners, he nevertheless failed.* (Close 1975: 93)
- b.  $\left\{ \begin{array}{l} \textit{Though} \\ \textit{While} \end{array} \right\}$  *he impressed the examiners, he nevertheless failed.*
- (12) a. *The boy, though evidently hurt by his fall, got up smiling.* (江川 1991: 352)  
 b. *The boy, though he was evidently hurt by his fall, got up smiling.*
- (13) a. *While resembling his father in appearance, he has inherited much from his mother in character.* (江川 1991: 345)  
 b. *While he resembles his father in appearance, he has inherited much from his mother in character.*

## E. 「様態」を表す場合

- (14) a. He moved his lips *as if trying to speak*. (Close 1975: 93)  
 b. He moved his lips *as if he were trying to speak*.
- (15) a. I am returning your letter, *as requested (to do)*. (Close 1975: 95)  
 b. I am returning your letter, *as I was requested (to do)*.

しかし、次のような「原因・理由」を表す場合には、接続詞に導かれる分詞構文は容認不可能となる。

- (16) a. \*I don't need these books now  $\left\{ \begin{array}{l} \textit{since} \\ =\textit{because} \end{array} \right\}$  *leaving school*.
- b. I don't need these books now  $\left\{ \begin{array}{l} \textit{since} \\ =\textit{because} \end{array} \right\}$  *I've left school*. (Close 1975: 92)

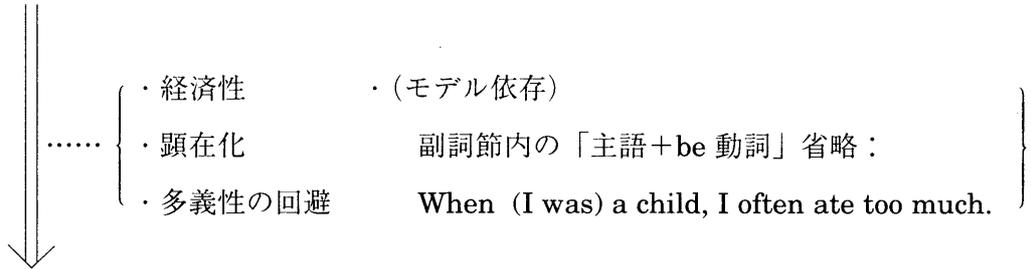
以上見てきたように、分詞構文が接続詞を伴う場合、主節に対する意味関係には一定の制限があり、不思議なことに「原因・理由」を表す意味関係は容認不可能である。

## 3. 分析

2節において、接続詞付き分詞構文が主節に対して「時」「同時性」「条件」「譲歩・対比」「様態」などを表すことはできるが、「原因・理由」を表すことはできないということが明らかになった。それでは、このような事実をどのように捉えたらよいのであろうか。

結論を先に述べれば、本分析では、動的文法理論を基盤にして接続詞を伴わない通常分詞構文がまず習得されると仮定し、この場合主節に対して（様々な意味関係のうち）特に「原因・理由」を表す意味が最も基本的・本来的であり、接続詞付き分詞構文は後の段階になって習得されると考える。そして、このような拡張が起こる動機づけとして経済性、顕在化、多義性の回避、およびモデル依存の原理が関わっているという提案をする。このことを図式すると次のようになる。

- (17) a. 通常の分詞構文： **Leaving school, I have never met George again.** (少なくとも「時」か「理由」かの点で多義だが、「理由」の意味が最も基本的・本来的)



- b. 接続詞付き分詞構文： **Since leaving school, I have never met George again.**

一般に (17a) のような通常分詞構文は文脈によって様々な解釈され、その多義性ゆえに一種の表現効果を生むのではあるが、中でも主節に対して「原因・理由」を表すのが最も基本的な解釈であり、その点でこの意味関係は分詞構文が本来もっているものと言っても過言ではない。そして、「原因・理由」の意味関係に留まる限りは特にさらなる拡張の必要などないと考えられる。しかし、文脈が整い、「原因・理由」以外に例えば「時」を表す意味関係が自然になった場合、できるだけ不要な表現形式を使わずに（すなわち、できるだけ経済的な方法で）表現したい意味を顕在化するという必要性が生じることになる。こうした状況から「～以来」という意味を顕在化させるために、すでに存在している副詞節内の「主語+be 動詞」省略をモデルとして、接続詞 **Since** が (17a) の通常分詞構文の先頭に導入され、(17b) のような接続詞付き分詞構文が可能となると捉えることができる。このように接続詞付き分詞構文が生成されることにより、通常分詞構文に見られた多義性は回避され、併せて、**Since I left school, I've never met George again.** という従属節に見られた多義性をも回避することができるのである。

では、なぜ (17b) の生成法を接続詞の付加と捉え、副詞節内での「主語+be 動詞」省略とは見なさないのでしょうか。これは、**Since I left school** から **Since leaving** への派生がそれほど単純ではなく、この分析のままだと、なぜ「原因・理由」の場合に省略ができないのかが原理的に説明できないからである。<sup>3</sup> 他方、付加と捉える分析では、基になる通常分詞構文には主節に対して本来「原因・理由」の意味関係があるため、「原因・理由」を示す接続詞を加える必要などないが、経済性に反して敢えて加えると意味がダブルために容認可能性が低くなるという説明が可能となる。

モデル依存に関してであるが、接続詞付き分詞構文が新たに可能となるのは、そもそも習得の前段階において副詞節内の「主語+be 動詞」省略構造がすでに存在しているという

仮定に起因している。すなわち、当該の接続詞付き分詞構文を習得する以前に、以下の(18)～(22)のような副詞節の中で「主語+be 動詞」の(慣用的)省略が可能となっており、この構造が接続詞付き分詞構文を次の段階で習得可能にするモデルの役割を果たしているということである。

- (18) a. *When (I was) a child I had a habit of blinking my eyes.*  
 b. *She was willing to work beyond office hours when (it was) necessary.*  
 c. *He is guilty until proved otherwise (=until he is proved innocent).*  
 d. *We'd like you to pay this bill as soon as (it is) convenient.*
- (19) *I often get good ideas while (I am) shaving.*
- (20) a. *Campers will be arrested if [they are] found in this vicinity.*  
 b. *I'll check the list again if (it is) possible.*
- (21) a. *Frost is possible, though [it is] not probable, even at the end of May.*  
 b. *His manner, if [it was] patronizing, was not unkind.*
- (22) *They began to dance as if (they were) charmed by the music.*

(江川 1991: 403-404)<sup>4</sup>

#### 4. おわりに

本稿では、接続詞を伴う分詞構文が主節に対して「時」「同時性」「条件」「譲歩・対比」「様態」のような様々な意味関係が可能であるにもかかわらず、「原因・理由」を表す場合にはこの「接続詞+分詞構文」が許されないのはなぜかに注目して議論を行った。その答えとして、通常分詞構文はそれ自体主節に対して「原因・理由」の意味を担っているという仮定を行い、そこから、意味関係の種類に応じた接続詞付加の可能性が決まってくるという動的分析を示した。

このような分析の妥当性をさらに高めるには、**supporting evidence** として、本稿で取り上げた現代英語における大人の実事だけでなく、子供の母語習得に関する事実、および、英語史に関する事実を調べる必要がある。また、そもそも通常分詞構文がどのようにして可能となったかを探る必要もある。これらの点については稿を改めることにしたい。

## (注)

1. (4)~(16) のイタリック体は筆者による。また、分詞構文には次のような「時間的順序関係・結果」を表す場合もあるが、これは（従位接続詞ではなく）等位接続詞の **and** を用いてパラフレーズするタイプなので、本稿では取り上げなかった。

The typhoon hit the city, causing great damage. (江川 1991: 344)

(→ The typhoon hit the city, and caused great damage.)

2. (5a) や (6a) の **-ing** 形は、分詞ではなく動名詞と見なすこともできる。また、次の引用から分かるように、Close (1975) は「時」を示す接続詞付き **-ing** 形を対応する定形の副詞節 から **reduce** したものと見なしている。

A finite adverbial clause of TIME(2.37) can be reduced to an **-ing** clause by retaining the subordinating conjunction but deleting the subject and the auxiliary (if any)--provided the subject is the same as in the main clause. (Close 1975: 92)

また、Close (1975) は、同じ「時」でも接続詞が **as, as soon as, till, until** の場合にはこのような **reduction** は許されないと指摘している。ただし、江川(1991)は、後述の(18)のように Close とは異なる判断を示している。

3. 換言すれば、省略における **recoverability** の条件だけでは、「原因・理由」の場合も他と同様に省略可能と誤って予測してしまうということである。

4. (18)~(22) のイタリック体は筆者によるものであり、[ ] の部分は筆者が加筆したものである。なお、これらの例の中には、(19) のように通常に分詞構文にあとから接続詞が付加されたとも分析できるものがある。したがって、(4)~(15) の事実群との間で分析法について一部「交通整理」が必要かもしれない。

## (参考文献)

Close, R. A. (1975) *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.

江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 東京：金子書房

Kajita, Masaru (1977) "Towards a dynamic model of syntax." *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.

## Abstract

### A Study of the English Participial Construction with Conjunction

SASAKI Kazutaka

The purpose of this paper is to give an analysis of the English participial construction with conjunction from the viewpoint of grammatical dynamism as proposed by Kajita (1977).

First, we look at several types of examples concerning 'the conjunction + participial construction', compared with the ordinary participial construction and the adverbial clause. Next, we present an analysis in which 'the conjunction + participial construction' can be generated on the basis of the underlying ordinary participial construction and the condensed adverbial clause by using the notions *economy*, *spell-out*, *avoid ambiguity*, and *model-dependency*. In this analysis, we focus on explaining why participial constructions cannot co-occur with conjunctions indicating reason.

Finally, to make a more valid analysis, we mention that further investigation of language acquisition and English history is required.

(1998年4月15日受理)